

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02576

研究課題名(和文) 言語行動の変化モデル構築に関する研究

研究課題名(英文) Study on construction of change model of language behavior

研究代表者

篠崎 晃一 (Shinozaki, Kouichi)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：00206103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近年の日本語研究では、对人的配慮を担う表現の研究が著しいが、使用実態の記述が十分でない点が多く残されていた。本研究でこれらの未解明の問題に取り組み、使用実態の記述が進んだことで、日本人の言語行動の地域差の一端を明らかにできた。また、使用実態の地域差の記述にもとづき、言語行動の包括的な地域差を導出するためのモデルを得た。そして、言語行動の変化モデル構築のための重要な要因である、都市規模の差という社会的要因を実証的に洗い出すことが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって言語行動の使用実態の基礎的な記述から変容の考察まで、日本語学における一貫した言語行動の研究の基盤を確立できた。それにより、他言語の言語行動との比較が容易になった。また、記述された言語行動の使用実態は、日本語教育などの分野で、場面に応じた適切な言語行動の習得に資する基礎資料となる。加えて、本研究で洗い出した「都市規模の差」という、言語行動の変化に関わる社会的要因は、对人的配慮表現の変化にも通底するものと見込まれ、その意味で对人的配慮表現の変化の研究の深化にも貢献できる。また、本研究で明らかにしたような言語行動の地域差は、気づかれにくいことばの地域差の存在を周知することにつながる。

研究成果の概要(英文)： In recent years, research into politeness expressions has become popular in the field of Japanese language research. However, even in the study of politeness expression, the actual usage of language behavior has not progressed sufficiently. In this research, we worked on the investigation of the actual usage of language behavior, and some of the regional differences in Japanese language behavior could be clarified. Moreover, based on the description of regional differences in actual usage of language behavior, we obtained a comprehensive model for deriving regional differences in language behavior. Then, we were able to empirically identify the social factor "difference in city scale", which is an important factor for constructing a language behavior change model.

研究分野：日本語学、方言学、社会言語学

キーワード：言語行動 地域差 変化 言語的発想法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、日本語の言語行動の地域差を捉える研究は、挨拶、謝罪などを表現する言語形式のバラエティに着目したり、待遇表現を地域ごとに体系的に捉える研究が主であった。

しかし、例えば「ペン貸して / 貸してくれる / 貸してもらえますか / 貸していただけますか」のような言語形式の選択だけでなく、「ペン貸してもらえますか」という表現を用いるにしても、「申し訳ありませんが、ペン貸してもらえますか」、「筆入れを忘れてしまったので、申し訳ありませんが、ペン貸してもらえますか」のように、どのような機能を持った要素をどう組み合わせるかという観点も重要であり、そういった言語行動の実態に地域差があることを指摘してきた(篠崎晃一(2010)「働きかけ方の地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房)。さらに、例えば、買い物にお店に入ってからお店を出るまでのように、言語行動を一連の流れとしてみた時、そのあり方に地域差があることも指摘した(篠崎晃一・小林隆(1997)「買物における挨拶行動の地域差と世代差」『日本語科学』2)。

このように、言語行動の地域差は、申請者をはじめとするいくつかの研究によって、近年盛んになってきた。しかし、どのような項目にどれほど地域差があり、総体としてどのような地域差が描かれるのか、いまだ明らかになったとは言えない。

例えば、2014年に申請者が行った言語行動に関する予備調査では、別れ時の言語行動に地域差が見られる。

図1は「昼間、友人と会っていて、別れるとき、どのような言葉をかけますか。」という設問に対し、「バイバイ」「じゃあね」のような定型的な言葉だけ返すか、それに加えて「気を付けて」などの気遣いの言葉を添えるかを聞いたもので、関東、関西の若年層にアンケートを行ったものである。出身地別に、西日本、東日本に分けて集計すると図1のように西日本出身者が気遣いの言葉を添えることが多いことが分かる。また、それぞれの別れ方に対する感じ方や、褒め、催促、不満、外国人からの道尋ねなどの場面で差が見られた。このような未解明項目の実態調査をはじめ、言語行動の地域差の研究には、総じて次のような課題が挙げられる。

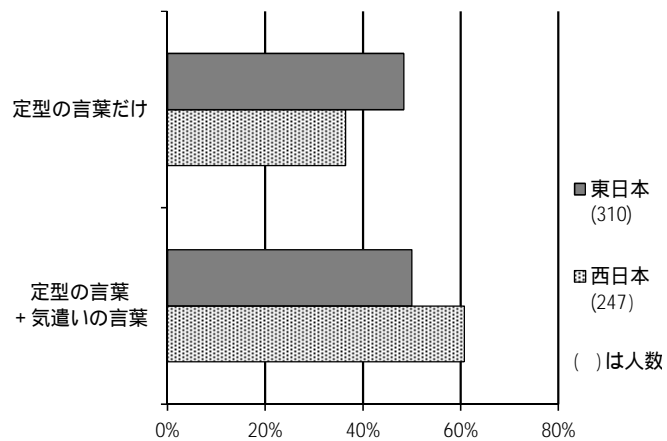


図1 別れ場面での気遣いの言葉の添加(友人)

- (1)未解明の項目の地域差・世代差を調査し、言語行動の使用実態を総体的に明らかにする。
- (2)言語行動の地域差と地理的要因、社会的要因(社会構造など)の関係を明らかにする。
- (3)地域差の記述の上に発展的に成り立つ、言語行動の変化の研究を行う。

2. 研究の目的

筆者はこれまでに、日本語の言語行動の地域差について、依頼や買い物場面など、いくつかの場面についての調査・記述を行い、非言語要素や言語要素の組み合わせ、言語行動自体の有無など、言語行動の考察に必要な観点を見出し、そういった点を射程に入れつつ、総体的に言語行動の地域差を明らかにし、その背景を考える必要性を唱えてきた。

本研究は、いまだ実態解明が十分ではない、いくつかの場面の言語行動の使用実態の地域差を、先述の観点を重視して記述し、その記述資料をもとにして、言語行動の地域差を生む要因について明らかにするとともに、言語行動の変化のモデルを構築することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の調査地域の設定にあたっては、総体的なことばの使用実態の地域差を理論的に考察した小林隆・澤村美幸(2014)('ものの言いかた西東'岩波新書)を参考にする。両氏は、総体的なことばの地域差の根幹となる言語的発想法の地域差の枠として、a. 発達地域(近畿地方)、b. 準発達地域(九州を除く西日本・東京を中心とした関東地方)、c. 準未発達地域(東北を除く東日本・九州・沖縄地方)、d. 未発達地域(東北地方)という区分を示した。申請者の予備調査でも、a、bの区分に差がある見通しを得た。そこで、本研究も、ひとまずこの区分を基盤にして使用実態を調査し、その資料をもとにして言語行動の変化のモデルを構築する。総じて研究期間内に以下の ~ を達成する。

言語行動使用実態の解明

まず、言語行動の変容の考察の基盤となる使用実態の調査を行う。a、b、c、dそれぞれの

地域について、代表地域を選び、次の2つの視点で、アンケート調査を行う。

- 1 言語地理学的な視点での調査（分布調査）
- 2 社会言語学的な視点での調査（世代差調査）

言語行動変容の考察

の資料をもとに、地域差や世代差の観点で言語行動の変容を明らかにする。

- 1 -1の調査結果を踏まえ地理的動態の考察を行う。
- 2 -2の調査結果を踏まえ世代差から見た変容の考察を行う。

言語行動の変化モデルの構築

、及びこれまでの研究成果をもとに、言語行動変化の内的要因、世代差や都市化の度合いの関わりという言語変化の外的要因、それぞれの言語行動の変化への影響を整理し、言語行動の変化モデルを構築する。

アンケート調査の質問項目の設計にあたっては、準備調査の結果（篠崎・中西 2017）や、他の言語行動調査（東北大学方言研究センター2009、尾崎 2011 など）の項目をもとに、＜冗談による応答＞、＜心情表示＞など（＜ ＞内は言語行動の名称）未解明の言語行動場面を優先し、かつ言語行動の方言区画の軸となる観点を織り込んだ質問項目を立てた。具体的には、ある場面で積極的に発言するかどうかという「発言性」、発言が決まりきったものか具体的なものかという「定型性」、相手への配慮を示す言いかたをするかどうかという「配慮性」、目立つ動作を伴うかどうかという「動作顕示性」、言いたいことを間接的に言うか直接的に言うかという「間接性」、コミュニケーションに積極的かどうかという「積極性」、会話を演出しようとするかどうかという「演出性」などである。

【研究体制】

図2は本研究の流れと研究体制である。本研究の基盤となる言語行動使用実態の解明について、調査地域が広範囲に及ぶため、研究分担者と担当範囲を分けて調査にあたった。アンケート配布に際して、各地の研究者に協力を得た。

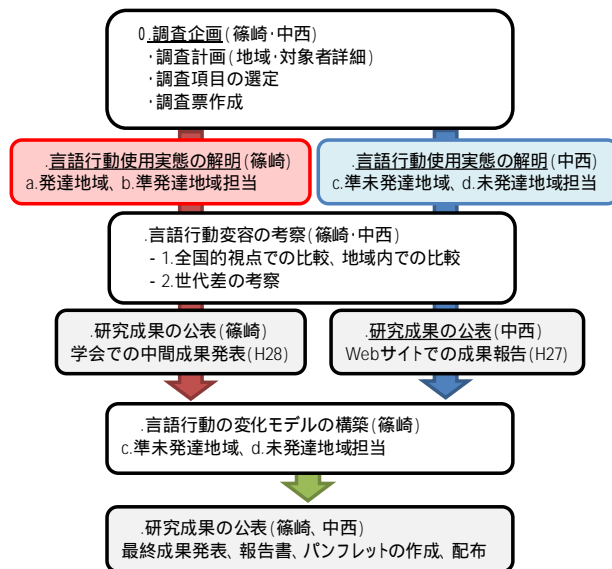


図2 本研究の流れと研究体制

また、研究の進展に伴い、の変化モデルを構築する重要な要因として、地域差を生む背景に、言語行動への意識が関わるのではないかという仮説を得た。そこで、「発言性」や「配慮性」等に関する言語行動の意識調査アンケートも追加で企画し、実施する運びとなった。

4. 研究成果

(1) 言語行動使用実態の解明について（「言語行動使用実態の解明」に対応）

言語行動の実態については、全52項目54質問（付問含む）を設け調査を行った。言語行動の意識については、全26項目の質問を設け調査を行った。研究期間全体を通じて、アンケートについては、表1のような回収数となった。表1中、赤字・青字の数値は、目標回収数を達成できた地域である。一方、協力者、協力機関が見つからず、目標数を達成できない地域もあった。これらの地域の実態及び意識の解明は今後の課題である。

表1. アンケート回収数内訳

地域区分	言語行動調査			言語行動意識調査		
	学生	社会人	合計	学生	社会人	合計
北海道・東北地方	261	118	379	7	1	8
関東地方	388	172	560	76	5	81
中部地方	181	21	202	39	3	42
近畿地方	252	78	330	157	50	207
中国地方	150	12	162	63	12	75
四国地方	105	4	109	65	2	67
九州・沖縄地方	179	6	185	12	3	15
総計	1516	411	1927	419	76	495

分析にあたっての観点は、地理的要因である地域差のみならず、社会的要因である年代差、特に社会経験の差（学生か社会人か）という点も重視した。顕著な地域差を見せた項目を数例上げると、以下のような結果が見られた。

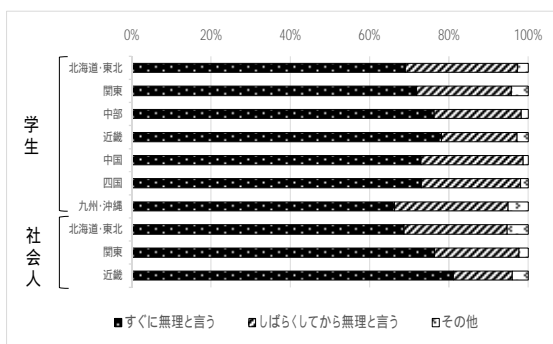


図3 <努力演出>断り

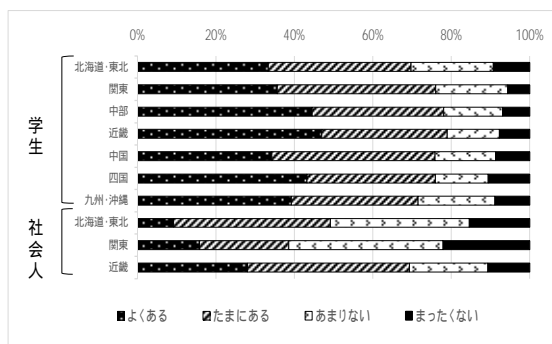


図4 <過度な心情表出>感想伝達

図3は、無理な頼みごとをされたときの場面で、その場ですぐにはっきりと「無理です」と断るか、「できるだけ善処してみます」と言ってその場は相手を安心させ、しばらくしてから無理だったと断るか、という断り方を尋ねた結果である。図4は、知人に猛暑の暑さを訴えるとき、「暑さで汗が沸騰する」や「体が溶けてしまいそうだ」のような過度な心情表出の表現をすることがあるかを尋ねた結果である。関西地方で、断り場面ですぐに「無理」と言って配慮せず、心情表出場で、オーバーな表現で演出するなどの特徴が見られる。このように、未解明の様々な言語行動の地域差を明らかにすることが出来た。

なお、これらの調査結果は、本研究の研究成果物をすべて発表した後、フィードバック用 Web サイトで、言語行動の地域差のデータベースとして、個人情報切り離したデータを公開し、言語行動の変異研究に有用な資料の一つとして提供する予定である。

(2) 言語行動変容の考察について（「言語行動変容の考察」に対応）

本研究では、言語行動の変異のあり方を解明するために、多様な言語行動の実態から、言語行動の包括的な地域差、すなわち言語行動の方言区画を導出するためのモデルを提唱するに至った。まず、で明らかにした方言区画導出のために質問に織り込んだ観点に沿って、同一観点の質問をまとめる。そして、質問の中でそれぞれの観点を反映した選択肢の値を平均値と比べ、顕著な部分をマークしていく。そうすることで包括的な地域差を見出すことができる（表2）。

表2 言語行動の地理的変異導出モデル

言語行動	観点	学生							社会人		
		北海道・東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	北海道・東北	関東	近畿
<努力演出>	配慮性			-	-			+		+	-
<過度な褒め>	演出性				-	+	+	-	-		++
<冗談による応答>		+	--		+	-				--	+
<過度な心情表出>										--	++
<過度な勤め>	定型性										+
<あいさつ省略>					+		--	+	--	+	+
<声かけ>	発言性		+							-	+
<値切り>							+			-	++
<注意>										-	+
<交話的コミュ対応>	間接性					-					
<交話的コミュ>			+	--		+	-		-	-	++
<交話的コミュ>	積極性					-		+	++		-

表2は分析結果の一部を用いた例であるが、包括的な地域差が見える。さらに、同じ「定型性」の観点でも、学生の九州・沖縄地方が「あいさつ省略」では「+」、声かけでは「-」となっており、同じ傾向になるとは限らないことがわかる。このように様々な質問から抽出した観点に沿って特徴をマークし、地域/社会年齢差を通覧して比べることで、それぞれの観点での地域差を見出し、ひいてはすべての観点を射程に入れた相対的な地域差を洗い出すことができる。

(3) 言語行動の変化モデルの構築について(「言語行動の変化モデルの構築」に対応)

本研究で最終目標としていた、言語行動の変化モデルについては、における多様な変異のあり方の分析から、重要な言語行動の変化の要因を洗い出すに留まった。

最も大きな成果は、社会的要因としての都市構造の差の影響を実証したことである。

言語行動は言語の運用を題材にする分野であり、それゆえ家族構成や通勤形態、生活形態など、地域の暮らしぶりや、その暮らしぶりの基盤となる社会のあり方が、言語行動のあり方に密接に関わる。そこで、言語行動の方言学的研究を進める上では、社会のあり方の差を捉えるような社会的要因の観点からも分析を行い、人口密度を指標にした都市規模の差が、言語行動の変異に関わっていることを明らかにした。なお都市規模の分析に際しては、それぞれの回答者の言語行動特徴形成基準地域の人口密度をもとにデータを3分類した。図5aは、結果比較のため、地域別の観点で整理した結果を示してある。

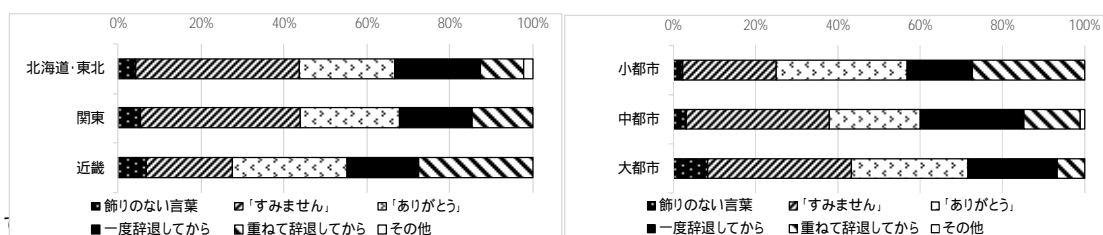


図5a <感謝儀礼> 食事呼ばれ【地域差】 図5b <感謝儀礼> 食事呼ばれ【都市規模差】

図5aを見る限り、北海道・東北は「すみません」を同じ程度使う傾向を示しており、一方、近畿は「重ねて辞退してから」の回答が多いという特徴が見える。しかし、同じデータを都市規模の観点から分析すると、図5bようになる。こちらでは、都市規模の大小といくつかの選択肢の間に相関がみられる。「飾りのない言葉」(=飾りのない言葉で、いただくという気持をありのままに伝える)、「すみません」を言って受けるという回答は、都市規模が大きくなるほど割合が増し、「重ねて辞退する」という回答は、都市規模が小さくなるほど割合が減じている。つまり、図5aの、関東や近畿などの大都市圏を含む地域に見られる「飾りのない言葉」、「すみません」、「重ねて辞退する」の回答の多寡は、都市規模の大小の影響を受けている可能性がある。それを考慮に入れて考えると、大都市に多い言語行動である「すみません」を、関東と同じ程度の割合で示す北海道・東北は、実はその点に特徴があると言える。そして、小都市に多い「重ねて辞退する」を、大都市を含むにも関わらず最も高い割合で示す近畿も、そこに特徴があるということである。これらの分析結果は、地理的観点のみならず、社会的観点からの分析の重要性を示すものと言える。また、この種の都市規模の影響を受けやすい言語行動のデータを研究対象とする場合は、インフォーマントの言語行動特徴形成基準地域の構成比にも気を配る必要がある、ということが言える(篠崎2018)。

このように本研究を通して、言語行動の変化モデル構築の際に重要な要因となる、都市規模の差という社会的要因を洗い出すことが出来た。一方、地域差を生み出す要因として地域ごとの言語行動への意識が関わっているという仮説のもとにアンケート調査を行ったが、こちらの分析に関しては、顕著な地域差が得られなかった。言語行動の意識と変異のあり方の関わりについてはデータを増強し、分析を行う必要がある。

これらの研究進展状況を踏まえ、一定の確度をもった言語行動の変化モデルの構築は、今後の課題とした。

<引用文献>

尾崎喜光(2011)『国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究—関西方言と他方言の対照研究』科学研究費補助金成果報告書
 小林隆・澤村美幸(2014)(『ものの言いかた西東』岩波新書
 篠崎晃一(2010)「働きかけ方の地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
 篠崎晃一(2018)「言語行動の変異を捉える」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房
 篠崎晃一・小林隆(1997)「買物における挨拶行動の地域差と世代差」『日本語科学』2
 東北大学方言研究センター(2009)『消えゆく日本語方言の記録調査 言葉遣い記入票その2』東北大学方言研究センター

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 篠崎晃一	4. 巻 -
2. 論文標題 言語行動の変異を捉える 多角的な観点からの検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コミュニケーションの方言学	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 あいさつの方言学のこれまでとこれから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コミュニケーションの方言学	6. 最初と最後の頁 37-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎晃一、中西太郎	4. 巻 67巻2号
2. 論文標題 言語行動の東西差 準備調査から傾向を探る	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京女子大学紀要論集	6. 最初と最後の頁 83-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎晃一	4. 巻 -
2. 論文標題 買い物場面における言語行動の地域差 レジでの声かけ・少額の会計への高額紙幣支払い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西太郎	4. 巻 -
2. 論文標題 新年のあいさつ・不祝儀のあいさつの定型性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語行動の方言学	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 篠崎晃一、中西太郎
2. 発表標題 言語行動の変異の解明に向けて
3. 学会等名 日本語学会2017年度春季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中西太郎
2. 発表標題 言語行動の多様性：配慮の言語行動を中心に
3. 学会等名 第3回 ベネファクティブとポライトネス研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井上史雄・木部暢子編著・日高水穂・小林隆・鎌水兼貴・大西拓一郎・朝日祥之・村上敬一・半沢康・早野慎吾・三井はるみ・高木千恵・中本謙・大野眞男・郡史郎・有元光彦・佐々木冠・沖裕子・渋谷勝己・篠崎晃一ほか著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 304(244-252)
3. 書名 はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる28章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果の公開
<http://disasterlinguistics.jimdo.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中西 太郎 (Nakanishi Taro) (30613666)	跡見学園女子大学・文学部・准教授 (32401)	